

参考資料3

やんばる地域の鳥類相に関する有識者ヒアリング概要

沖縄島北部の鳥類相に詳しい鳥類の専門家2名へヒアリングを実施した。

1. 実施概要

日時：2022年10月12日 11:05～12:50（一人目）

2023年1月16日 15:58～17:22（二人目）

資料：ヒアリングメモ、鳥類相リスト

2. 収集した情報、ご意見

(1) やんばるの鳥類相に関する文献について

- ・世界遺産推薦書のやんばる地域についての鳥類リスト、国土交通省河川水辺の国勢調査（ダム湖版）内の鳥類調査、環境省ガンカモ類の生息調査に記録がある鳥類種について取りまとめれば、やんばるの鳥類相は網羅される。
- ・補足できるものとしては「やんばるの森—輝く沖縄のいきものたち」（日本野鳥の会やんばる支部（編集）、久高 将和）がある。基本は写真集だが、やんばるの鳥類リストが載っている。資料の鳥類相リストと重複していると思われるが確認して欲しい。
- ・そのほかに、名護博物館紀要に嵩原健二氏が珍しい種について報告しているが、一般的な種についてではなく、網羅的ではない。

(2) やんばるで越冬するガンカモ類について

- ・本州の飛来数と比べると少ないが、毎年飛来する。
- ・飛来数は、資料にある河川水辺の国勢調査が正確で、3年に1回程度の頻度で実施し、ダム湖に船を下ろして、湖面からくまなくカウントする。環境省のガンカモ類の生息数調査は、観察地点から見える範囲の数のみで渡来数の実態を現していない。
- ・飛来時期は早ければ9、10月から飛来し、翌年の2、3月まで滞在する。
- ・1、2月に本州で寒波に見舞われると、飛来する渡り鳥の数が増える。
- ・水深のあるダム湖には潜水ガモ（キンクロハジロ、スズガモ）が多くいる。いわゆる淡水カモ類は、餌を採食する際は水田、浅い池などにいる。
- ・大宜味村の大保ダムにある野鳥観察池にはカモ類が多く生息する。ヒドリガモ、ハンビロガモ、コガモが多い。深いところでキンクロハジロが水草を食べている。
- ・カルガモについて、以前はヒナを見ることは珍しかったが、近年は通年で生息しており、特に金武町の水田に20羽ほど定着している。水稻食害の苦情が出ている。

(3) 鳥インフルエンザを拡散させる種（哺乳類を含む）について

- ・鳥類として、ガンカモ類のほかに、カワウ、オオバン、シロハラ、ハクセキレイ、ジシギなどがある。
- ・哺乳類としては、マングース、ネズミ類、イヌ、ネコ、イノシシが生息している。
- ・ガンカモ類が飛来する場所は、大きなダム湖の他にも、土地改良地区の水源池や山間部の

水辺などがあり、水浴びに来たヤンバルクイナとの接点がある。

- ・ヤンバルクイナ生体展示学習施設の近くの水辺にもカモが飛来し、隣に沖縄県家畜改良センターがあり、そのたい肥処理場に餌を探しにシロハラやヤンバルクイナが来る。
- ・近年はカワウが増加しており、羽地ダムだけで 240 羽、北部で 500 羽、沖縄本島全体では 1,000 羽程度、6 月から 3 月に滞在する。大量死はまだないが、死体を発見することがある。鳥インフルエンザの検査を実施したほうが良いのではないかと。
- ・カワウほどではないが、オオバンも数が増えている。大保ダムにあるビオトープに多い時には 100 羽程度飛来する。
- ・高病原性鳥インフルエンザを運ぶ可能性がある野鳥は飛来しているので、いずれは沖縄県内で高病原性鳥インフルエンザが発生すると考えている。
- ・ヤンバルクイナと高病原性鳥インフルエンザを運ぶ可能性のある鳥類との接触は、野外では防ぐことができないが、飼育施設は工夫すれば可能と考える。

(4) ヤンバルクイナ飼養施設周辺の鳥類相について

- ・同施設周辺で見られる種は、森林性の鳥がほとんどである。周辺に水場がないためガンカモ類のような水鳥はいない。水田は集落の近くにあるが、水鳥が群れているのはあまり見ない。
- ・リスクがある冬鳥としてはシロハラがいる。また、(本州産亜種の) ウグイス、アオジ、チュウサギ、サギ類(周りの牧草地で見られる。)が確認されている。
- ・留鳥としては、ハシブトガラス、キジバト、アカヒゲ、ノグチゲラ、ヤンバルクイナがあげられる。
- ・施設内へウイルスを運搬するリスクが考えられる種としては、ハシブトガラスがあげられる。12 月に金武町で高病原性鳥インフルエンザが発生した時、ハシブトガラスが水田経由で養鶏場に侵入したのが原因ではと個人的に考えている。ヤンバルクイナの天敵なので有害駆除しており、やんばるでの個体数は減少している。
- ・シギ・チドリ類が渡りをする際に立ち寄り場所としては、国頭村オクマリゾート裏手があげられる。淡水シギ類(タカブシギ、クサシギ、アオアシシギ、セイタカシギ)が見られる。

(5) その他

- ・海鳥類としては、少数のウミネコ、さらに少ないが、ユリカモメ、ズグロカモメ、セグロカモメの若鳥が飛来する。海鳥は、漁港に集まり他では観察されないため、海鳥からの伝播はゼロではないが可能性は低いと考える。
- ・沖縄県の野生動物救護施設における鳥インフルエンザ検査の課題として、希少種は鳥インフルエンザの検査を実施するが、その他の種は傷病鳥として運ばれてきても、高病原性鳥インフルエンザウイルスが院内に持ち込まれる可能性があるため、環境省の対応レベル 2 以上の場合には傷病鳥対応が難しくなっている。

以上